

あれ？ この曲はもしかして・・・？

何気なく聞いていると、どこかで聞き覚えのある旋律に出会うことがある。

音楽は、聴者の耳に、とある旋律を強く印象づけて残すことがある。そしてそれが脳の片隅に残っていて、何かの拍子に表に出てくることがある。それが懐かしの曲の回想だけであれば良いが、新たな楽譜に載る旋律と化すことだってあってもおかしくない。「心地よい旋律」には共通した点があるとも言われているので普遍的な心地よさが別な曲に生まれ変わって出てくることもあっても不思議はない。

類似した旋律に遭遇すると、短絡的に「もしかして・・・」と勘ぐる人もいるようだが、単なる偶然と見て楽しむ人もいる。

### <1> 春の小川はさらさら行くよ

ここ数年シベリウスの音楽にはまって抜け出せなくなっている。閑暇なひとときにも、慌ただしい一日のBGMにもフィンランディアや交響曲集などのCDが役にたっている。

「カレリヤ組曲」の中の「バラード」の終曲が近くなってきたところで突然「春の小川」が始まったかと思うような旋律が一瞬だけ流れる。まさかと思って聞き直してみても確かに「は～るのおが・・・」に聞こえる。



1892年、シベリウスは新婚旅行でフィン人の発祥の地カレリヤ地方を訪れる。そして、翌年の1893年に学生団体からの依頼に基づき、この地方の歴史や伝説を素材にした野外劇のための音楽を作曲、これがカレリヤ組曲である。間奏曲・バラード・アラマルチャ（行進曲風）の三つのパートからなり、管楽器と弦楽器の美しいハーモニーに聞き惚れていると突然現

れる「ミソラソミソ・・・」には驚く人が多い。

（上画像：フィンランドのシベリウス公園にあるモニュメント）

童謡「春の小川」は岡野貞一作曲・高野辰之作詞で1912年に発表した曲。この二人のコンビで作られた曲は「ふるさと」「春がきた」などかなり日本人の耳に馴染んだ曲が多い。

シベリウスの長い曲の中のたったの数秒の旋律を引用したとは思えず、偶然の一致とみるべきだろう。

心地よい旋律は国が変わっても、時が変わっても案外共通しているのかもしれない。

### <2> 星の界（よ）

「月なきみ空に きらめく光 嗚呼その星影 希望の姿

人智ははてなし無窮の遠（おち）に いざその星影 きわめも行かん」

子どもの頃に習った歌「星の界（よ）」は明治43年に文部省唱歌として登場した。今となってはこの難しい日本語を解せない人も大いに違くない。そのせいか、歌詞にはいくつものバージョンがあるようだ。

チャールズ・コンヴァース作曲の「Erie」という曲が原曲で、杉谷代水が詩を付けてこの歌が誕生した。

また、ヨーゼフ・スクライヴェンが歌詞を付けて「What a friend we have in Jesus」と言う賛美歌としても広く歌われてきた曲でもある。「いつくしみ深き 友なるイエスは・・・」という歌い出しを聞けば知っている人が多い比較的ポピュラーな賛美歌でもある。

「いつくしみ深き 友なるイエスは 罪科（つみとが） 憂いを 取り去りたもう

心の嘆きをつつまず述べて などかは下ろさぬ 負える重荷を」

この曲の一番が終わったところで二番に入らずに、「里の秋」の「ああ、母さんとただ二人 栗の実煮てます 囲炉裏端」のフレーズに自然に繋ぐことが出来る。前後の旋律と音階の関係がもたらす偶然ではあるが、この手の組み合わせは他にも沢山あるようだ。落語「宗論」の中にこれを織り込んでいる人が居た。

### < 3 > チャップリンの殺人狂時代

チャールズ・チャップリンの映画は、使用する音楽がクラシックの名曲であったり、自作の曲であったり様々で面白い。

「チャップリンの独裁者」の中では、床屋さんが「ハンガリー舞曲」にあわせてお客の顔を剃る。

「ライムライト」では自作の曲が優しい BGM としていくつものシーンで使われる。

「チャップリンの殺人狂時代」では、これまでのチャップリン映画とは違って「正装の紳士」になって登場する。各地を飛び歩きながら偽名を操り、金持ちで独り身の女性を狙って結婚詐欺を重ねて殺人までする悪役を演じる。映画の原題は「ムッシュ・ヴェルドゥ」。やがて警察に捕まり、裁判になって死刑台に送られるシーンで終わりになるが、斬首刑となり刑場に入る前に、「何か一言言い残すことはないか？」との牧師の促しで語る。

「国家が戦争という行為を通して 100 万人の命を奪っても犯罪にはならないのに一人の人間が人を殺すと犯罪になるというのは納得できない。私がやってきたことは国家が犯した罪に比べれば小さなものである」

チャップリンの「ナチスドイツへの反感」と「戦争という行為への反抗」のメッセージが示されている。

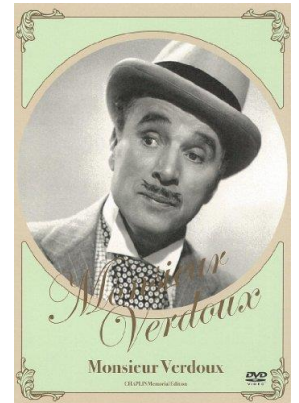
この映画の中で、チャップリン演ずるところの結婚詐欺師が富豪の女と戯れるシーンで歌う歌がいつも気になっていた。どこかで聞いたことがあるような旋律だな。。。。。

昭和 40 年代に流行った「黒猫のタンゴ」という歌と酷似している。もしかして「黒猫のタンゴ」の旋律はこの映画から。。。。？

と思って色々調べてみたら、「黒猫のタンゴ」は 1969 年にイタリアのとある音楽祭のコンテストで好成績を収めた曲を日本に持ち込んで日本語の歌詞をつけたものだった。原曲はマリオ・パガーニという人が作曲したもので「Volevo un gatto nero」という曲だということがわかった。

かたや「チャップリンの殺人狂時代」は 1947 年に制作した映画。時系列で考えてみると。。。。。

この辺で止めておこう。



以上